

# 「までだ」構文の意味・用法

張 銘

## 1. はじめに

現代日本語における「まで」の意味は、「到達の場所」(アフリカまできて)、「期限」(秋まで延ばしてよい)、「程度の限界」(限界にまで展開した)、そして「極端の場合を示して他を暗示」(年齢までで詳しくしるし)が先行研究によって明らかにされている(以上永野(1964)に参考)。しかし、「まで」が使用される文には、これ以外の意味が読み取れるものも見られる。次の(1)~(3)は、いずれも動詞に「までだ」あるいは「までです」が後接する用例であるが、(2)と(3)は従来の研究成果では解釈できない。(下線は張による。以下同様)

(1)「道もわからなくなりましたからここでごやっかいになりましょう、かないますならこの御簾の前を拝借させてください。阿闍梨の御用が済むまでです。」

(一利己主義者と友人との対話)

(2)「あなたのような方が、普通の人間と同じように、家庭的に暮して行く事ができるかと思つてちょっと伺ったまでです。」

(彼岸過迄)

(3)「これか、こいつあさっきの分だ。一話十両というじゃねえか」

「厭なことだ、ご免蒙りましょう」

「よかろう、それじゃ話さねえまでだ。」

(名人地獄)

(1)の「済むまでです」は「御簾の前を拝借する時期の期限」を示している。(2)の「~ちょっと伺ったまでです」は、「伺った理由はこれだけで他意はない」と解釈できる。(3)の「それじゃ話さねえまでだ」は、「一話十両がだめな場合には話さないという話し手の決意を表す」と解釈できる。

(2)と(3)の「までだ」から読み取れる意味が(1)と異なるのは、働きが異なるからであると考えられる。本稿では(2)と(3)のような文を取り上げて、文の意味と「までだ」の用法を明らかにしたい。

先行研究で考察された「まで」に体言あるいは連体修飾節が前接しているのに対して、このような文では「までだ」に用言が前接して事態を表す。また、(1)の「までだ」が体言ないし連体修飾節と用言の関係を表すに対して、(2)と(3)の「までだ」が話し手の意志に関わるよ

うに思われる。そして、(2)と(3)のような文は「まで」が文末ないし文節末にだけ用いられるなど、特定の条件を備えたものに限られていると思われる。そのため、本稿では(2)と(3)と同様な構造を有して同じ意味が読み取れる文を「までだ」構文と仮に称して、構文の特徴（成立条件）を考察する。そのため、例えば(1)のような連体修飾節が「までです」に前接する用例は、「までだ」構文の成立条件に満たさないものとして考察対象から除く（注1）。

なお、「までだ」構文は文末に典型として「までだ」が用いられて、「までです」や「までである」などの形式の違いは「までだ」構文の意味に影響しないと考えられるため、本稿では「までです」、「までである」、「までさ」、そして「までよ」などを区別しない。

## 2. 「までだ」構文の成立条件

従来の研究では明らかにされていない意味が読み取れる「までだ」構文は、それが成立するために以下の4つの条件が同時に満たされる必要があると考えられる（注2）。

- ①「までだ」が事態に後接して文末や文節末に用いられる。
  - ②「までだ」に話し手の判断内容としての事態が前接する。
  - ③話し手が判断をすることが必要とされる状況が不可欠である。
  - ④話し手の判断を促す状況と話し手の最終判断が連動して一体化している。
- 以上の4つの条件の中、①と②が「までだ」の直前に来る事態に関するもので、③と④は「までだ」構文の構造に関するものであるため、以下2つの節に分けて考察を進めていく。

### 2.1 「までだ」に前接する事態

「までだ」構文では、「まで」が必ず事態を表す用言に後接して文末ないし文節末に用いられる。

(4) 妻をもらって親をよろこばすことができないなら、ないほうがいい、老いばれ蛙に怒られたって、災難を受けて死ぬまでだ。（青蛙神）

(4)では「災難を受けて死ぬ」という話し手の決意が読み取れる。「までだ」に前接する「死ぬ」が「死ぬこと」を意味する用言である。「まで」が「災難を受けて死ぬ」という事態に後接して「までだ」のような文末形式になる。

「までだ」構文で「まで」が必ず文末や文節末に位置するのは、もともと文末や文節末に位置する事態を表す用言にだけ「まで」が後接する制限があるからである。一方、「まで」が体言や連体修飾節に後接する場合には、「までだ」のような形式として使用されても「までだ」構文にならない。例えば次の(5)には、「到達の場所」や「期限」の意味しか読み取れない。

(5)??災難を受けて死ぬ（時／場所）までだ。（作例）

また、事態を表さない動詞については、例えば状態動詞と言われる「泳げる」や存在動詞の「ある／いる」も、「泳げるまでだ」や「机があるまでだ」のような形として「までだ」構文に現れることができないと思われる。

「までだ」構文では、「までだ」に前接する事態が話し手による判断であると思われる。

(6)理窟ではない、貴様がどうしても無用の留立てをして、ここで拙者の往生際を邪魔立てしようというなら、してみろ、足手まといの貴様から先に叩き斬り、仏頂寺は心置なく腹を切って死ぬまでだ。(大菩薩峠新月の巻)

(7)「おい、お霜、今帰ったよ」厨に向かって声を掛けたが、声が掛かっても睡のことで、お霜が返辞をしようもない。いつもの癖で掛けたままであった。(名人地獄)

(6)は、話し手（仏頂寺）が「貴様を斬って自殺する」という決意（判断）を表している。未来における話し手自身の行動なので、話し手が当然それを決めることができる。(7)は、話し手（文章の作者）が、「声を掛けた理由はいつもの癖で他意はない」と説明している。このような理由説明も話し手による判断の一種であると解釈できる。全知の立場に立つ文章の作者は作中人物の行動の理由を知りうるのも不自然ではない。

一方、話し手が普通判断するまでもない事態は「までだ」構文に現れにくいと思われる。例えば「雨が降る」のようなことである。

(8)台風がきたら雨が降る。(作例)

(9)??台風がきたら雨が降るまでだ。(作例)

(10)台風が来たら避難する。(作例)

(11)台風がきたら避難するまでだ。(作例)

(8)の「雨が降る」ことは自然現象であり、台風で雨が降ることは話し手の判断によって明らかになると考えにくい。このような話し手の判断として成り立ちにくい事態に「までだ」をつけても、(9)のような不自然な文になる。収集した用例にも(9)のようなものがない。しかし(10)のように「台風が来る」という状況の下で「避難する」という事態は、話し手が自分の意志で実現させることができる。(10)のような文は、「避難する」という話し手の判断に「までだ」をつければ(11)のような「までだ」構文になる。

## 2.2 「までだ」構文の構造

「までだ」構文では、話し手の判断を促す状況の提示が不可欠であると考えられる。このような状況は、「までだ」構文の内部に提示される場合もあるし、「までだ」構文に先行する文脈に含まれる場合も見られる。

(12)「しかしそれまでにはこっちも疲労れよう」

「ナニ、疲労れたら休むまでよ」(加利福尼亚の宝島（お伽冒険談）)

⑬何も征矢野家の犯罪って奴を、あばき出そうために来たのじゃアない。たかだか酔狂な好奇心から、様子を探るために来たまでだ。探る必要はあるまいよ。

(十二神貝十郎手柄話)

⑭は「疲労したら」という状況が「までだ」構文の内部に提示され、話し手はこの状況に応じて「休む」ことを判断している。⑬では話し手が「あばき出そうために来たのじゃアない」という結論を述べている。この結論を証明する必要があることは話し手の判断を促す状況と考えられるが、この状況は「までだ」構文に先行する文脈から読み取れるものである。そして話し手が「までだ」構文を用いて「様子を探るために来ただけで他意はない」と説明する。

一方、話し手の判断を促す状況が提示されていなければ、「話し手の判断+までだ」だけでは「までだ」構文が成立できない。次の⑭と⑮は話し手の判断を促す状況が含まれていないが、いずれも不自然である。

⑭??休むまでだ。(作例)

⑮??酔狂な好奇心から、様子を探るために来たまでだ。(作例)

そのため、話し手の判断を促す状況は「までだ」構文においては話し手の判断としての事態と連動して一体化していると考えられる。

⑯余は彼の悪人の後に就いて歩み入る事になるか知らん、斯う思うとわれ知らず右の手が腰の短銃、衣囊の処へ廻った、撫でて見ると残念な事には短銃を持って居ぬ、エエ何うなる者か、真逆の時には此の拳骨と気転とに頼るまでさ。(幽霊塔)

⑯では「短銃を持っていない」ことが話し手の判断の前提となる状況で、「拳骨と気転に頼る」ことが話し手の判断として提示された事態である。「短銃を持っていない」状況に対応する方法は「拳骨と気転とに頼る」ことであるため、「短銃を持っていない」状況が変われば、「拳骨と気転とに頼る」判断をする必要性がなくなって「までだ」構文が成立できない。

そのため、「までだ」構文で「までだ」に前接する事態は特定の状況下の判断でそれを促す状況と連動するものであると考えられる。

### 3. 「までだ」構文の分類

本稿で「までだ」構文と称する文の意味について辞書では次のような内容が見られる。

⑰「それ以上のことではないという意を強調する。だけのこと。(古くなれば捨てるまでだ)」。(『日本語新辞典』)

⑱「それなりの理由があってそこへ至った地点を指す。(成功は幸運であつたまでだ)」。

(『広辞苑』(第5版))

以上の辞書と比べて、より詳しい記述がなされているのは『日本語文型辞典』である。「～までだ」という項目には、「v-るまで（のこと）だ」と「v-たまで（のこと）だ」に関する記述が見られる。その内容を次のようにまとめる。

①⑨「v-るまで（のこと）だ」（父があくまで反対するなら、家を出るまでのことだ。）

「現在の方法がだめでも落胆することはない、別の方法をとる」という話し手の決意を表す。

②⑩「v-たまで（のこと）だ」（そんなに怒ることはない。本当のことを言ったまでだ。）

「話し手がそのような行動をしたのは、単にそれだけの理由で他意はない」という意味を表す。

ただし、②⑩のような「話し手の決意」が読み取れない「v-るまで」文や、②⑪のような話し手が自分以外の人物の行動の理由を説明する「v-たまでだ」文も見られ、『日本語文型辞典』の記述はこれらの用例を解釈するには不十分であると思われる。

②⑪だがそういうなら、一体何が淫祠邪教であり、どういう宗教がそうでないか、どこに区別の標準があるのだろうかという疑問が、その代りに起きて来るまでだ。

（思想と風俗）

②⑫先生は、その言葉に何もとくべつな意味をもたせようとされたのではない。ただ先生のはっきりしたご決意と自分に対する愛憎とが結びついて、何の作為もなくそんな言葉と  
なってあらわれたまでだ。（次郎物語第四部）

②⑬は「までだ」に前接する「疑問が起きて来る」事態が話し手自身の意志による行動ではないので、「話し手の決意」と解釈できない。②⑭は「～何の作為もなくそんな言葉となってあらわれた」ことが「先生がそれを言った理由」であるため「話し手がそのような行動をしたのは、単にそれだけの理由で他意はない」と解釈しがたい。

したがって、本稿では「までだ」構文の典型的な形で収集した用例数からしても多数を占める「v-までだ」文の用例を中心に分析し、「までだ」構文の表す意味を再検討したい。

「までだ」構文の表す意味については、「までだ」に前接する動詞が「ル形」か「タ形」かによって大きく意味が異なり（本稿では『日本語文型辞典』にならって「v-るまでだ」と「v-たまでだ」と表記する）、さらに「v-るまでだ」文は「までだ」に前接する事態の動作主が一人称であるかどうかによって意味を分けることができる。また、「v-るまでだ」か「v-たまでだ」かによって意味が異なることには一部の例外も見られる。そのため、以下「v-るまでだ」、「v-たまでだ」、そして「v-るまでだ」の例外に分けてそれぞれの意味を考察していく。

### 3.1 「v-るまでだ」

「までだ」に前接する動詞が「ル形」である「までだ」構文は、基本的には「までだ」に前接する事態の動作主によって意味が異なると思われる。

②3 実の親より、当人より、ぞっこん惚れてる奴の意向に従った方が一番間違が無くて宜しい。早瀬がこの縁談を結構だ、と申せば、直ぐに妙を差上げますよ。面倒は入らん。先生が立処に手を曳いて、河野へ連れてお出でなすって構いません。早瀬が不可い、と云えば、断然お断りをするまでです。 (婦系図)

②4 考へるまではなからう。親友と思うてをるなら、をる、さうなけりや、ないと言ふまでで是か否かの一つじや。 (金色夜叉)

②5 大抵の約束を実行する場合を、よく注意して調べて見ると、どこかに無理があるにもかかわらず、その無理を強て押しかくして、知らぬ顔でやって退けるまでである。決して魂の自由行動じゃない。 (坑夫)

②3は「までだ」に前接する「お断りをする」という事態の動作主が一人称に相当する。「早瀬が不可いと云う」状況の下で、「(話し手側が) お断りをする」と判断している。この場合は、話し手が自分側の行動に関する判断をしているため「決意」を表す。②4は「までだ」に前接する「親友と思うてをるなら、をる、さうなけりや、ないと言ふ」という事態の動作主は二人称である。「考へるまではない」という状況の下で、話し手は聞き手が「親友と思うてをるなら、をる、さうなけりや、ないと言ふ」という行動を取るべきだと判断している。この場合は、話し手が聞き手の行動に関する判断をしているため「指示」を表すと言える。②5は「までだ」に前接する「知らぬ顔でやって退ける」という事態の動作主は三人称である。「約束を実行する場合」の状況では、話し手は「大抵の人が無理を強て押しかくして知らぬ顔でやって退ける」ことを判断として提示している。この場合は、話し手が第三者の行動に関する判断をしているため「結果提示」と解釈できる。

「v-るまでだ」文は、「までだ」に前接する事態の動作主が一人称の場合は話し手の「決意」を表し、二人称と三人称の場合はそれぞれ話し手による「指示」や「結果提示」を表すと考えられる。ただし、「v-るまでだ」文の用例は「までだ」に一人称が動作主である事態が前接するものが圧倒的な多数を占めるため、「v-るまでだ」文は話し手自身の意志を表すためのものである傾向があると言える。

「v-るまでだ」文の表す「決意」や「指示」、そして「結果提示」の意味は、「ル形」が発話時における未実現の事態と関係して、未来の可能性に関する話し手の考えを表すことと関わるように思われる。

### 3.2 「v-たまでだ」

「までだ」構文は、「までだ」に前接する動詞が「タ形」である場合には、話し手による理由説明を表す。理由説明の対象である事態は、話し手や第三者の行動がある。

㉔からかいやしません。美しいから美しいといった、までです。(海底都市)

㉔母は口でこそ、男も女も十五六になれば子供ではないと云っても、それは理窟の上のこととて、心持ではまだまだ二人をまるで児供の様に思っているから、その後民子が僕の室へきて本を見たり話をしたりしているのを、直ぐ前を通りながら一向気に留める様子もない。この間の小言も実は嫂が言うから出たまでで、ほんとうに腹から出た小言ではない。(野菊の墓)

㉔は、話し手は自分が「美しいと言った」理由は「美しいから」だけでそれ以外にはないと説明して、「からかいをした」ことを否定している。㉔は、話し手が「母が小言を言った」ことの理由を「嫂が言った」だけでそれ以外にはないと説明している。

なお、収集した「v-たまでだ」の用例には、「までだ」に前接する事態の動作主が二人称であるものが見られない。それは話し手が聞き手に対して相手のした行動の理由を判断して説明することが考えにくいからであると思われる。

「v-たまでだ」文が話し手による理由説明を表すことは、「タ形」が発話時における実現している事態と関わるため、すでに実現した事態についての理由の後付を表すことと関係するように思われる。

### 3.3 「v-るまでだ」の例外

3.1で「v-るまでだ」文の基本的な意味を考察したが、「v-るまでだ」文に㉔のような例外も見られる。

㉔それで、ただここにはほんの一つの空想、ただし多少科学的の考察に基づいた空想あるいは「小説」を備忘録として書き留めておく。もしこれらの問題に興味をもつほんとうの考証家があらばありがたいと思うまでである。(怪異考)

㉔は「v-るまでだ」の用例であるが、話し手による「書き留めておく理由説明」を述べると解釈できるため、「v-たまでだ」の意味に近いと考えられる。

㉔が「v-たまでだ」に近い意味を持つのは、「思う」のような発話時における事態の実現、未実現に拘束されない動詞が「までだ」に前接することと関わるように思われる。「思う」以外も「言う」が典型的なものとして挙げられる。㉔は「云うまでだ」の用例である。

㉔すべてこれらがなかったならば、自分はこんな思い切った事を云やしない。いくら思い切った事を云ったって自慢にやならない。ただこの通りだからこの通りだと云うまでである。(坑夫)



### 3.4まとめ

「までだ」構文は、「v-るまでだ」と「v-たまでだ」の意味が大きく異なるため、大きく2種類に分けることができる。そして「v-るまでだ」では「まで」に前接する事態の動作主によって意味が異なる傾向が見られる。それをまとめると次のようになる。

「v-るまでだ」：ある状況の下での話し手の最終判断を示す。

一人称：ある状況の下での話し手の決意を示す。

例：太郎が行かなければ私が行くまでだ。(作例)

二人称・三人称：ある状況の下での話し手による指示や結果提示を表す。

例：太郎が行かなければ次郎が行くまでだ。(作例)

「v-たまでだ」：ある状況に応じての話し手による理由説明を述べる。

ある状況の下での、話し手による理由説明を表す。

例：事実そうにちがいないから、そう言ったまでだ。(次郎物語第四部)

ただし、「v-るまでだ」文と「v-たまでだ」文の違いは、話し手の判断としての事態と発話時との関係の違いにあって相補分布しているため、話し手のある状況に応じての判断を示すことについては両者が共通していると思われる。したがって、「までだ」構文は主として話し手が自分の意志を表す表現の一種で「一定の状況下における判断」を示すものであると考えられる。

## 4. 「までだ」の機能

3節では「までだ」構文の表す意味を分析したが、これらの意味が「までだ」とどう関わるかを以下考察していく。

㉑父が反対するなら、家を出るまでだ。(作例)

㉑は「v-るまでだ」文で「父が反対するなら」という状況のもとでの「家を出る」という話し手の決意を表す文である。「までだ」が付かなければ話し手の意志を表す文であるが、こうした「決意」は「までだ」の使用と関係するようと思われる。

㉑における「決意」には「家を出ることは普通取らない極端の手段である」意味と「家を出る以外の手段を取っても無駄なので他の手段が考えられない」意味が読み取れる。話し手がこうした「決意」を表すためには、「家を出る」ことを極端な手段として示すことと、「家を出る」の程度に及ばない手段は考えられないことを同時に示す必要がある。この2つの意味を示す機能を持つのが「までだ」であると考えられる。「まで」が「太郎まで来た」のようにそれに前接する物事を極端のものとして示してそれに達していないものを含めて示すことができるからである。㉑においては、「父が反対するなら」という状況の下で「けんかする」、



「母に助けを求める」、そして「家を出る」など複数の可能性が考えられるが、「家を出る」ことを極端かつ適切な手段として示すのは、それ以下（以外）の手段を取っても無駄で、つまり他の手段が考えられないことを含意することである。

③何も征矢野家の犯罪って奴を、あばき出そうために来たのじゃアない。たかだか酔狂な好奇心から、様子を探るために来たまでだ。探る必要はあるまいよ。 (113再掲)

③は「v-たまでだ」文で「来た」ことに対する話し手の理由説明であるが、「までだ」が付かなくても「理由説明」になる。ただし、③から読み取れる「理由はそれだけで他意はない」という意味は「までだ」の働きによるものと思われる。また、「たかだか」からも分かるが、話し手は「酔狂な好奇心から、様子を探るために来た」ことを当たり前のこととして示している。こうした意味も「酔狂な好奇心から、様子を探るために来た」ことが極端であることと、それ以外の理由がないことに言い換えることができる。④の「v-るまでだ」文と同じように、これらの意味は、極端の物事を示してそれに及ばないものを含めて示す「まで」の働きと関わるように思われる。③においては、「来た」ことの理由は様々の可能性があるが、すでに実現している事態なので事実として1つしかない。話し手は「好奇心から来た」ことを当たり前（極端）の場合として示し、それ以外の理由は過去のことなので考えられないため、「自分が当たり前のことしかやっていない」というニュアンスを表現できる。

したがって、「v-るまでだ」文も「v-たまでだ」文も、「までだ」がそれに前接する事態を極端の場合として示す働きがあるように思われる。また、発話時における未実現の事態を述べる「v-るまでだ」文では、様々の可能性が考えられるため、取り上げた事態以外の可能性が考えられないことも「までだ」によって示されていると思われる。一方発話時における実現している事態を述べる「v-たまでだ」文では、過去の事実はそもそも1つしかないで、「他の可能性がない」という意味を示す働きは「までだ」が担うとは判断しにくい。

## 5. おわりに

「まで」が一定の条件を満たす文の文末や文節末に使用される場合には、文からこれまでの研究では触れられていない「特定の状況下における話し手の最終判断を示す」という意味が読み取れる。本稿では、このような意味が読み取れる文を「までだ」構文として取り上げてその成立条件を検討して、意味上の分類を試みた。

「までだ」構文の表す意味の特徴は、話し手が「までだ」に前接する事態を極端の場合として示すことと、それ以外の事態を排除する含意があることである。すくなくとも前者は「までだ」が担って、「極端の場合を示して他を暗示」という「まで」の機能と関係するように思われる。後者については、「v-るまでだ」文においては「までだ」が担うように思われ

るが、「v-たまでだ」文においては同様なことが判断しにくい。

本稿は現代語における「までだ」の意味・用法を取り上げて分析を試みたが、課題がまだ残されているかもしれない。また、「までだ」と関わりのある用例として②と③が見られる。

②君が東京で何をしているか、ちゃんとこっちで解ってるんだから、もし不都合な事があれば、京都へ知らせてやるだけだ。(明暗)

③「そら上がるぜ。—いや、いけない、ずり下がって来ては……」

「今度は大丈夫だ。今のは試して見ただけだ。さあ上がった。大丈夫だよ」

(二百十日)

②と③の「だけだ」は、いずれも「までだ」に置きかえても文の意味に大差が生じないと思われる。したがって、「までだ」の意味・用法を検討するには、こうした「だけだ」との比較が必要であると考えられる。今後「だけだ」をも視野に入れて「までだ」の性格を一層明らかにしたい。

#### 注

- 1：本稿で使用する用例は、青空文庫（著作権期限の過ぎた作品のデータベース）から「青空鯨」を用いて収集したものである。（<http://palm.nishinari.or.jp/namazucgi>）
- 2：今回収集した用例では、この4つの条件が同時に満たされていないものが見られない。

#### 〈参考文献〉

- 永野 賢（1964）「マデ」と「マデニ」『口語文法講座 第3巻』明治書院  
鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房  
奥津敬一郎（1966）「マデ」「マデニ」「カラ」—順序助詞を中心として—『日本語教育』9号  
井上祐子（1983）「格助詞「まで」の研究」言語学研究会編『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房  
新村出編（1998）『広辞苑（第五版）』岩波書店  
グループ・ジャマシイ編著（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版  
松井栄一編（2004）『日本語新辞典』小学館

#### 〔付記〕

成稿後、小原佳那子（2006）「助動詞担当のマデダの意味」（『国文鶴見』第四十号）に接する機会を得た。現代語における「までだ」の意味・用法を扱う論文であり、参照されたい。

（ちょう めい 岡山大学大学院社会文化科学研究科）